

令和6年

沖縄全戦没者追悼式



第34回「児童・生徒の平和メッセージ」図画部門 小学校（高）の部 最優秀賞
那覇市立天久小学校5年 知念 由依「平和をいのって」

日時：令和6年6月23日（日）午前11時50分～午後0時40分
場所：平和祈念公園（糸満市摩文仁）

沖縄県 沖縄県議会

令和6年沖縄全戦没者追悼式次第

- | | | |
|---|----------|--------------------|
| 1 | 開式の辞 | 沖縄県副知事 |
| 2 | 式辞 | 沖縄県議会議長 |
| 3 | 黙とう | |
| 4 | 追悼のことば | 沖縄県遺族連合会会長 |
| 5 | 献花 | |
| 6 | 平和宣言 | 沖縄県知事 |
| 7 | 「平和の詩」朗読 | |
| 8 | 来賓あいさつ | 内閣総理大臣、衆議院議長、参議院議長 |
| 9 | 閉式の辞 | 沖縄県副知事 |
| ◆ | | |
| 1 | 総合司会 | NHK沖縄放送局アナウンサー |
| 2 | 手話通訳 | 沖縄県身体障害者福祉協会登録手話通訳 |

式 辞

本日ここに、岸田文雄内閣総理大臣をはじめ、衆参両院議長、御来賓の御臨席と、御遺族の御列席を賜り、全ての犠牲者の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げますとともに、御遺族の皆様にご心から哀惜の意を表します。

ここ沖縄の地では、恐ろしく凄惨な地上戦において、20万余りもの人々が命を落としました。

想像してください。兵士や住民の区別なく無差別に浴びせられる空襲や艦砲射撃、近くで炸裂する爆音が耳をつんざき、昼夜を問わずどこに居ても止まない鉄の暴風が、人々を恐怖と悲しみに染めて死地に追い立てる様を。

想像してください。愛する家族が、隣人が、あなたの掛け替えのない人が血を流し、裸足で逃げ惑う姿を。

想像してください。個々には何の怨恨もなき彼我の若者たちの尊い生命が、国家間の戦争により奪われざるを得なかったことを。

戦争は、かくも悲惨なものだと、体験者は繰り返し語ります。

この悲しみを繰り返すことなく、人類が永遠の平和こそを目標にして努力する。このほかに御霊に報いる道はないものと信じます。

戦後79年が経つ今、私たちが生きる世界は分断され、国際秩序は大きな挑戦を受けています。国際情勢が大きく変わる中、私たち沖縄県民も歴史の転換点にあります。戦争により破壊し尽くされた街、血を流し嘆く人々の姿に、私たちは、否応なく一般住民が巻き込まれる戦争の恐ろしさを垣間見ます。

沖縄に生きる私たちは、時が流れるほど、戦禍の苦しみが忘れられない苦

しみとなることを知っています。人間の尊厳を守り抜くことの重要さは、沖縄の土地の記憶に深く刻まれています。この記憶を、どう受け継ぎ、より良い未来を創るためにどう活かすべきか。私たち沖縄県民にも世界中の人々にも問われています。

今だからこそ、世界が分断や対立を乗り越えて、協調に向かうよう、沖縄から伝えるべきことがあります。

今日、沖縄には、世界各国から多くの人々が訪れ、観光立国日本の先陣を切っています。彼らは沖縄の魅力は癒しだと言います。

真の癒しは、互いに関心を持ち、相手を受け入れなければ、実感できません。意見や立場の違いを乗り越え、癒しの輪を広げる努力こそが、世界平和の礎になると、この土地に眠る御霊は教えているのではないのでしょうか。さすれば、私たちは、目を開き、多様性を認め、包摂性をもって、現実に向かっしていかなければなりません。この土地に生きる私たち沖縄県民にとり、これこそが平和の道であると確信します。

結びに、本日、心ならずもこの式典に参列できなかった皆様の平和への想いと共に、戦争のない世界的な恒久平和の確立に力の限り尽くすことを、ここに固くお誓い申し上げ、式辞といたします。

令和6年6月23日

沖縄県議会議長 赤嶺 昇

平和宣言

あの忌まわしい悲惨な戦争が、かつて、この美しい島で繰り広げられました。

鉄の暴風といわれるおびただしい数の砲弾による空襲や艦砲射撃により、私たちの島は、戦火に焼き尽くされ、多くの尊い命が失われました。

私たちは、あの悲惨な体験から戦争の愚かさ、命の尊さ、平和の大切さという教訓を学びました。

あの戦争から79年の月日が経った今日、私たちの祖^{うやふあーふじ}先は、今の沖縄を、そして世界を、どのように見つめているのでしょうか。

広大な米軍基地の存在、米軍人等による事件・事故、米軍基地から派生する環境問題など過重な基地負担が、今なお、この沖縄では続いています。

加えて、いわゆる、安保3文書により、自衛隊の急激な配備拡張が進められており、悲惨な沖縄戦の記憶と相まって、私たち沖縄県民は、強い不安を抱えています。

今の沖縄の現状は、無念の思いを残して犠牲になられた御霊を慰めることになっているのでしょうか。

かつて、沖縄の本土復帰にあたり、日本政府は、「沖縄を平和の島とし、わが国とアジア大陸、東南アジア、さらにひろく太平洋圏諸国との経済的、文化的交流の新たな舞台とすることこそ、この地に尊い生命を捧げられた多くの方々の霊を慰める道であり、沖縄の祖国復帰を祝うわれわれ国民の誓いでなければならない。」との声明を出しました。

この声明を思い起こし、沖縄県民が願う、平和の島の実現のため、在沖米軍基地の整理・縮小、普天間飛行場の一日も早い危険性の除去、辺野古新基地建設の断念など、基地問題の早期解決を図るべきです。

世界に目を向けると、今なお、争いは絶えることなく、ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエル・パレスチナ情勢など、戦争という過ちを繰り返し続けています。

東アジアでは、米中対立や中国の軍事力の強化、台湾や朝鮮半島を巡る問題など、自国の軍事増強により、抑止力の強化がかえって地域の緊張を高めている一方、経済面での緊密な結びつきが併存するなど、安全保障環境が複雑化しています。

世界の平和と安定に向けて、各国・各地域に求められているのは、それぞれの価値観の違いを認め合い、多様性を受け入れる包摂性と寛容性に基づく平和的外交・対話などのプロセスを通じた問題解決です。

私たち沖縄県民は、万国津梁の精神で、近隣諸国との交流により、信頼関係を築いてきた歴史があり、また、「命どう宝」「ユイマール」「チムグクル」など多様な価値観の受容、相互扶助といった精神文化を継承しています。

「新たな建議書」「平和の礎」「沖縄平和賞」は、人類普遍の価値である平和を願う「沖縄のこころ」の表れであり、世界の恒久平和は、沖縄県民の切なる願いです。

私は、沖縄が国際平和創造拠点となり、万国津梁の精神をもって、「沖縄のこころ」を国内外に発信し、世界の平和構築や相互発展、国際的課題の解決に向け地域外交を展開していくことが、地域の緊張緩和と信頼醸成に貢献し、世界の恒久平和に繋がっていくものと確信しています。

国連ピース・メッセンジャーであり、自然保護や人道問題へ取り組む世界的な環境活動家でもあるジェーン・グドールさんは、「私たちの行動は、

毎日必ず何かしらの影響を世界に与えています。どんな行動を取るかが
“違い”を生み、どのような“違い”を生み出したいのかを決めなければ
なりません。」と語っています。

一人ひとりの思いや行動は、たとえ微力でも、確実に世の中を変えてい
く力があると、勇気を与えてくれる言葉です。

今こそ、私たち一人ひとりに求められるのは、不条理な現状を諦めるの
ではなく、微力でも声をあげ、立ち上がる勇気、そして、行動すること
です。

先人から受け継いだ精神文化をもって、他者を尊敬し、思いやり溢れる
社会を造り上げ、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立に向けて、
共に絶え間ない努力を続けてまいりましょう。

わった一元祖んかい 誇 ないる沖縄あらんと一ないびらん。

わった一や近 隣ぬ諸国とう交 流っしちやるたみ、信頼関係ぬ仲までい
積み上げていちやる歴史ぬあいび一ん。

わった一や平 和大切にす精神ぬあいび一ん。

わった一や価 値観ぬ違げ一ぬあていん互に容認合ぬないる精神文化ぬ
継承さつと一いび一ん。

沖縄県が世界ぬ恒久平和ぬ架橋ないるぐとう一緒っし目標んかい向かて
いいちやびらな。

We strive to make Okinawa an island we and our ancestors are proud of,
We have a history of trust that has been established through exchanges
with our neighboring countries.

We bear hearts that cherish peace.

We carry on the spirit of accepting diverse values.
We, the people of Okinawa, shall together aim to be the bridge
to world peace for all time.

本日、慰霊の日に当たり、犠牲になられた全ての御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、戦争に繋がる一切の行為を否定し、人間の尊厳を重く見る「人間の安全保障」を含めた、より高次の平和を願い続け、この島が世界の恒久平和に貢献する国際平和創造拠点となるよう、全身全霊で取り組んでいくことをここに宣言します。

令和 6 年 (2024年) 6 月 23 日

沖縄県知事 玉城 デニー

< しまくとぅば・英語翻訳 エッセンス >

私たちの祖先に対して誇れる沖縄でありたい。

私たちは近隣諸国との交流により信頼関係を築いてきた歴史があります。

私たちは平和を大切にする心があります。

私たちは価値観の違いを認め合う精神文化を継承しています。

沖縄県が世界の恒久平和の架け橋となるよう、ともに目指してまいりましょう。

「これから」

沖縄県立宮古高等学校三年 仲間 友佑

短い命を知ってか知らずか
蝉が懸命に鳴いている
冬を知らない叫びの中で
僕はまた天を仰いだ

あの日から七十九年の月日が
流れたという
今年十八になった僕の
祖父母も戦後生まれだ
それだけの時が
流れたというのに

あの日
短い命を知るはずもなく
少年少女たちは
誰かが始めた争いで
大きな未来とともに散って逝った

大切な人は突然
誰かが始めた争いで
夏の初めにいなくなつた
泣く我が子を殺すしかなかった
一家で死ぬしかなかった
誰かが始めた争いで
常緑の島は色を失くした
誰のための誰の戦争なのだろう
会いたい、帰りたい
話したい、笑いたい
そういくら繰り返そうと
誰かが始めた争いが
そのすべてを奪い去る

心に落ちた
暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ
微かな光さえも届かぬような
絶望すらもないような
怒りも嘆きも失くしてしまひそうな
深い深い奥底で
懸命に生きてくれた人々が
今日を創つた
今日を繋ぎ留めた
両親の命も
僕の命も
友の命も

大切な君の命も
すべて

心に落ちた
あの戦争の副作用は
人々の口を固く閉ざした
まるで
戦争が悪いことだと
言っではいけないのだと
口止めするように
思い出したくもないほどの
あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰いだ
抜けるような青空を
飛行機が横切る
僕にとってあれは
恐れおののくものではない
僕らは雨のように打ちつける
爆弾の怖さも
戦争の「せ」の字も知らない
けれど、常緑の平和を知っている
あの日も
海は青く
同じように太陽が照りつけていた
そういう普遍の中にただ
平和が欠けることの怖さを
僕たちは知っている

人は過ちを繰り返すから
時は無情にも流れていくから
今日まで人々は
恒久の平和を祈り続けた
小さな島で起きた
あまりに大きすぎる悲しみを
手を繋ぐように
受け継いできた

それでも世界はまだ繰り返してる
七十九年の祈りでさえも
まだ足りないというのなら
それでも変わらないというのなら
もっともっとこれからも
僕らが祈りを繋ぎ続けよう

限らない平和のために
僕ら自身のために
紡ぐ平和が
いつか世界のためになる
そう信じて

今年もこの六月二十三日を
平和のために生きている
その素晴らしさを噛みしめながら

雲一つない青空の下で

沖縄県立開邦中学校3年

島袋 莉安

雲一つない青空。湿気を含んだ南風が私の頬を撫でる。ああ、今年も夏が来た。私は、平和祈念公園を訪れて、平和への思いを馳せた。今年で沖縄戦終結から79年。この地であった出来事を考える。

「平和」

平和という言葉を目にする時、真っ先にこの言葉の真の意味を考える。平和。それは、安心して暮らせることだろうか？それとも、家族と共に過ごせること？また、やりたい勉強ができること？友達と遊べることなのだろうか？広辞苑には、

「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること。」

とある。今、私達ができている全てのことは、この「平和」の上に成り立っているものだと思う。この平和が失われた時、私達は今、あたり前にできていることを失ってしまうだろう。あたり前だと思っていたことは、あたり前ではなかったとそのとき気付くのだろう。しかし、そうはなりたくない。手遅れになる前に気付くにはどうすればよいか。そのために私は平和について真剣に「学ぶ」ことが今こそ必要だと思う。

「あなた達は、戦争体験者から直接お話を聞ける最後の世代です。学んだことを、あなた達が次の世代へと伝えて下さい。」

平和学習があると先生方が必ず言う言葉だ。私達は戦争体験者の方から直接学ぶことができる最後の世代だからだ。私達が次の世代へ伝えていかねば次の世代は学ぶことができなくなってしまう。だから今の私達が戦争と平和について学ぶことは、これからの未来にとってもとても大切で必要なことなのだと思う。

昨年、私は豊見城市の青少年国際交流事業でハワイに行き、その際に、パールハーバーを訪れた。これまでパールハーバーのことを日本側の立場として学んできた私にとって、アメリカ側の立場に立って、実際の展示物や資料などを見ることで、ハワイでの真珠湾攻撃の恐ろしさをより感じ、どちらの立場に立っても忘れてはならない出来事であることをその場で強く実感した。これは、私が小学校、中学校の平和学習でひめゆりの塔やガマで感じた気持ちと同じであった。

私達は、幼い頃から沖縄戦のことを平和学習などで学ぶため、これからも決して忘れてはならない出来事であると強く感じている。しかし、今まで相手国の立場になって戦争について考える機会はあまりなかった。相手の国にも日本、沖縄と同じように風化させてはならない出来事がもちろんあるのだ。それに気付くには相手の立場に立って歴史を見る必要があると感じた。互いの国が、自国の立場だけではなく相手国の立場に立って歴史をふ

り返ることで、互いに戦争、そして平和への理解が深まり、平和への思いが強くなるのではないだろうか。また相手の立場に立って物事を見て考えることができるようになってこそ、これからすべきことに気付くのではないだろうか。そうすることで、世界はさらに平和へ向かい、新たな争いがなくなってゆくよう努力をしていく人が増えるのではないだろうか。

ハワイへ行った際に、私はパンチボウルも訪れた。パンチボウルは、第一次、第二次世界大戦やベトナム戦争で戦没した4万人以上の兵士が眠る国立戦没者墓地だ。平和の礎をつくることに関わった私の祖父によると、平和の礎はパンチボウルを参考につくられたそう。平和の礎にはパンチボウルとは異なった点がある。平和の礎は、軍人、民間人、国籍の区別なく、沖縄戦などで亡くなられた全ての人々の氏名が刻まれている。私は、平和の礎は、相手の立場に立ったからこそ、敵、味方関係なく平等に氏名が刻まれ、全ての人に平和を願っている記念碑になったのだと思う。

戦争について学ぶことは、時に怖くなってしまふことがある。目を逸らしてしまいたくなるような恐ろしい出来事もある。だが、それを学ばないと過去の出来事を知らないままに成長してしまうだろう。知らないまま無知でいることはさらに恐ろしいことを引き起こすことになると思う。過去の戦争という出来事についてまずは自ら学びたい。学ぶことで、「戦争は二度と起こしてはならないことだ。」と皆が思える未来を作りたい。そして、様々な見方で学ぶことで決して過去として風化させてはならない出来事を自分が知り、広げ伝えていくことができるだろう。

今、戦争体験者から話を直接聞ける私達は、自ら進んで聞き尋ね、学んでいくことが義務なのではないだろうか。そして学んだことを、後世の人達にも伝えていくことがもう一つの課せられた義務ではないだろうか。私達がこの義務を果たすことで、さらに平和な世界へとつながり、今あるあたり前があたり前のまま次の世代へつながっていくことを望む。

平和の礎から、世界に向けて平和の波が広がることを願い、私は平和への想いを過去から未来へと馳せて、雲一つない青空を見上げた。